

JIA 建築家大会 2025 千葉

「せんのちから」

多様性を尊重し繋がりを生み出す、社会と建築のあり方について

「JIA 建築家大会2025千葉」は、多様性をテーマに、個性溢れるトークセッションを2日間にわたり各会場にて展開します。市民や学生にも開かれた新しい大会のあり方を、関東甲信越支部として全国に発信する試みとなります。今後の大会の持続性や自立性に弾みをつけるため、JIA会員の1,000人以上の登録をめざして広報活動をしています。今号では、大会の運営を進める各支部からのメッセージと企画の一部を紹介します。

自律的であり連関する建築家の多様な活動

今村創平 企画部会長

建築家の役割は多様化し、建築と社会の関係にもさまざまな形態があります。無数の課題があり、一方でそれらは建築という領域の中で、緩やかに繋がっています。予定されている20あまりのセッションでは、100を超える登壇者が知見を披露・交換し、固有のトピックが深掘りされます。同時に大会参加者の方々は、複数のセッションに横断的に参加することで、それらがお互いに連関していることに気づくでしょう。環境、教育、地域、保存、教育、AI、国際、職能、さまざまな事柄のアクターが連関しあう、〈自律分散型ネットワーク〉のプラットフォームに、JIAは、JIA全国大会はなり得るか、そうしたことを問う試みです。JIAでは、「建築家とは？」という問いかけがこれまでも繰り返しながら進んできましたが、理想的とされるひとつの建築家像がある時期はとうに過ぎました。建築家、市民、研究者、行政などさまざまなひとが、性別、所属、世代、人種を超えて交ざり合うこの機会に、JIA会員の皆さんの参加は欠かせません。

「多様性」を直観的に伝える広報をめざして

会田友朗 広報部会長

多様な登壇者によるトークセッションをはじめとする、多彩な企画の広報に知恵を絞っています。目玉の1つは、全部会と緊密に連携しながら、充実化を図っている大会参加者へ配布予定のパンフレットです。当日のガイドブックであり、楽しい読み物であり、活動の多様性を示す保存版の記録となることも意図しています。一部のセッションからは原稿をいただき、今号の『Bulletin』でも紹介させていただいています(pp.12-13)。また、ウェブサイト、SNS等、会員だけでなく市民の方々に多く参加いただける大会にするべく広報戦略を練っています。グラフィックは「せんのちから」をヒントに、千葉の地域性や、多様性というテーマをJIA公式ロゴをモチーフに展開する案を、若手デザイナーに提案していただきました。一例としてチラシを今回掲載しています(pp.9-10)。

大会広報には支部のみならず協会の協力も不可欠です。大会に参加いただくことはもちろん、ぜひ広報へもお力添えをお願いいたします。

ひとり一人の「ちから」が集う場をめざして

大山早嗣 運営部会長

本大会は関東甲信越支部所属の会員をはじめ、全国の会員ならびに関係者の協力をいただきながらつくり上げることを目指しています。2日間で20のセッション、各種展示を行う上で会場運営においては多くの協力が必要となります。大会運営に携わる会員も大会参加者であり、ひとり一人の負担を軽減することで、それぞれが参加したいセッションや各種企画に参加することが可能になり、大会が有意義なものになると考えています。

千葉県文化会館の大ホールを含む4つの会場でセッションは同時並行で行われますので、会場への誘導がポイントになります。誘導スタッフの配置はもちろんですが、参加者が直観的に理解できるサイン・案内を計画しています。

現在、大会に向けて千葉地域会のみならずみなさんに多大な協力をいただきながら、さまざまな「おもてなし」の企画を練っています。2日間会場内の飲食エリアとレセプションパーティーの「食」については特に注目してください。

コンパクトで開かれた大会のために

鹿田健一郎 財務部会長

コンパクトで市民に開かれた持続可能な大会を目指して準備が進んでいます。財務部会では支出を抑えながらも充実した大会になるよう、各支部と連携し調整を続けています。

大会は会員の皆さまの登録料と大会趣旨にご賛同いただいた個人、企業様からの協賛金によって支えられています。すでに協賛をいただきました皆さまにはこの場を借りて御礼申し上げます。市民の方々に建築家を理解してもらうには、まずは建築を身近に感じてもらうことが必要です。財務部会では交流委員会と法人協力会員の方々の協力を得て、市民にも分かりやすい企業展示コーナーを計画中です。協力会員の皆さまの扱う製品や技術は、建築の重要な構成要素でありながら実は生活のとても身近にあるものです。展示を通して建築は多様な要素の集積によって生まれていることを再認識していただき、市民社会と建築家の距離が縮まることを期待しています。大会の成功には会員の皆さまのお力が必要です。たくさんの方々のご参加をお待ちしております。

JIA Convention Chiba 25

JIA建築家大会 2025 千葉

せんのちから

2025年11月7日[金] 10:30-17:30 (開場 10:00)

2025年11月8日[土] 10:00-17:30 (開場 9:30)

メイン会場. 千葉県文化会館

※11/7開催の一部の企画のみ「千葉大学あのはな同窓会館」が会場になります。

一般参加. 無料、事前登録は不要です

JIA会員: 別途定める登録費(事前登録制)が必要です。(8月登録開始予定)

主催: 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
運営: 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 大会実行委員会
Web: <https://jia-convention.net/2025chiba/> [JIA建築家大会2025千葉公式ウェブサイト]

未来の建築・まちづくりを
市民や学生のみなさんと考える
20のトークセッション

大会



大塚谷津田

JIA建築家大会 2025 千葉

せんのちから

多様性を尊重し繋がりを生み出す、社会と建築のあり方について

The Expertise of 1000

Respecting Diversity and Creating Connections:
Society and Architecture



JIA建築家大会2025千葉
公式ウェブサイト

JIA Convention 2025 Chiba

開催趣旨

公益社団法人 日本建築家協会 (JIA) は、2025年11月7日(金)、8日(土)の2日間、千葉県文化会館と千葉大学あひのほな同窓会館を会場に「JIA建築家大会2025千葉」を開催します。今年の大会テーマは「せんのちから」です。

今、私たちの身のまわりにはさまざまな問題が溢れています。〈持続性をもつ好ましい社会〉を実現するためには、幅広い分野にわたる多様な知見や職能、技術の融合が欠かせません。私たちは、これらの課題解決に取り組んでいる建築家、技術者、行政、運営者、市民、学生など計100名以上に登壇していただき、これからの建築や地域について共に考える、1,000人会議を企画しました。20を超えるトークセッションを通して、多様性を尊重し繋がりを生み出す、社会と建築のあり方について考えます。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

トークセッションの予定 (一部)

2025年6月時点のトークセッションの予定です。
今後、内容が変更になる場合があります。最新情報は公式HPでご確認ください。

地域の個性を活かす Locality

- 千葉のまちの真ん中をデザインする～開府900年から1000年へ向けた持続可能な賑わいづくりと人づくり～

地域社会・地域産業との繋がり Community

- 都市と地方が混在する千葉の食・文化の現状と未来～農とまちを繋ぐコミュニティから考える～

未来社会に向けた新たな取り組み Innovation

- 事前防災への取組と今後の展望

次世代を担う建築家たち Education

- 社会に発信する建築家のメディア実践を考える

世界の建築家・日本の建築家 Architect

- 私にとっての「槇文彦」
- 「建築家」とは、どのような存在なのか
- International Presidents' Forum (IPF)
- 《越境建築家》たちとの対話
—「越境」が建築家にもたらすもの—
- 偉大な先輩建築家に学ぶX 大高正人—人と都市と建築



千葉県文化会館と千葉文化の森



千葉市北西部にある「タンジョウ農場」



もうひとつのナイロビ



以下に、予定されているセッションを紹介します。内容は現時点の暫定的なものです。各セッションの会場やスケジュールは決定次第、皆さまにお届けします。全国から集まる各支部の会員や一般参加の市民の方々をお迎えするため、ぜひ多くの支部会員の参加をお待ちしています。千葉大会を、どうか関東甲信越支部をあげて盛り上げてゆきましょう！ (支部広報委員会)

企画紹介

*企画タイトルは現時点のものです。内容と併せて変更される可能性もあります。

企画タイトル	キーワード
地域の個性を活かす Locality	
歴史的意義ある建築の保存と誇るべき日本の景観 ～価値ある建物の保存・利活用を県民と考える＝県立図書館と大高建築～	建築文化と景観の啓蒙
DOCOMOMO Japan 25年 これまでとこれから	歴史、継承
千葉のまちの真ん中をデザインする ～開府900年から1000年へ向けた持続可能な賑わいづくりと人づくり～	建築家と地域の活性化
地域社会・地域産業との繋がり Community	
都市と地方が混在する千葉の食・文化の現状と未来 ～農とまちを繋ぐコミュニティから考える～	食と農
地域づくりへの新たなアプローチ	まちづくり
ケアと建築	福祉、地域交流
木材の非生産県における地域木材活用のための社会の仕組みづくり ～安定した木材生産にむけた千葉県の林業と建築家の連携～	環境、地域経済
未来社会に向けた新たな取り組み Innovation	
建築とテクノロジーの関係を問い直す ——若手建築家が見据える設計の未来流	技術革新
気候変動や社会変容を見据えた持続可能な社会基盤の未来像 ～建築・ランドスケープの新たな関係性を探る～	公共空間
土と水と建築・都市	環境、脱炭素
事前防災への取組と今後の展望	建築と社会、災害対策
次世代を担う建築家たち Education	
若手建築家(40歳以下)が考えるこれからの建築・まちづくり	若手建築家
建築学生が考える「これからの建築と社会」@千葉	学生、建築教育
建築教育の潮流と国際的なあり方	建築教育
第19回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展「In-Between」から考える：建築をたがやし情報を育てる実践	情報、生成AI
社会に発信する建築家のメディア実践を考える	建築と社会、建築メディア
世界の建築家・日本の建築家 Architect	
私にとっての「榎文彦」	つながり
「建築家」とは、どのような存在なのか	資格制度
International Presidents' Forum (IPF)	国際関連
《越境建築家》たちとの対話 —「越境」が建築家にもたらすもの—	国際関連
偉大な先輩建築家に学ぶX 大高正人——人と都市と建築	建築家
〈総括企画〉本大会の振り返りとこれからの建築家にあり方について	自律的連関

||お知らせ||

- 公式ウェブサイトを開設しました。 <https://jia-convention.net/2025chiba/> (7月下旬にプログラム詳細を掲載予定です)
- 上記サイトからリンクされる大会登録サイトは、8月初旬にオープン予定です。
- 本号と同日発刊の『jia magazine』437号(2025年8月号)でも大会関連記事を掲載しています。ぜひあわせてご覧ください。

歴史的意義ある建築の保存と誇るべき日本の景観

価値ある建物の保存・利活用を県民と考える
= 県立図書館と大高建築

[登壇予定者]

- 頼原澄子 千葉大学 / DOCOMOMO Japan 副代表理事
- 高橋直子 伝統建築研究所
- 篠田智仁 建築主事 / 茂原市役所職員
- 森田敬介 森田建築設計事務所 他

[企画担当]

森田敬介(千葉地域会代表)、安達文宏(千葉地域会副代表)

近代以降の日本では、価値ある歴史的建造物や素晴らしいまち並みが所有者の一存で壊され失われてきました。民間の建築物所有者だけでなく、公共建築物の管理者である地域行政においても、行政の理屈の下である意味では自由に解体されています。そして今日では、物価の安さと安全さに起因したインバウンド需要に着目して、俄かに「観光立国」を標榜しはじめた日本。しかし、それは経済上の理由から生じたキーワードであり、建築やまち並みの歴史と価値を誇りとして、日本を護る真のムーブメントとは全く異質なものを感ずります。

日本の地方行政では、建物の歴史的価値や芸術的価値に全く関係なく、建物を管理する担当課の職員が、建物や歴史の価値についての知識もなく、評価も受けないうちに、建物の築年数という視点だけで解体のリストが作成され、順次、解体が執行されます。この状況になって初めて地域住民や心ある建築専門家が知って、慌てて莫大な労力と費用と奉仕によって「保存運動」が行われますが、よほど幸運でなければ保存を勝ち取ることができません。世界でも有数の歴史を誇る日本ですから、行政担当者が今かかっているメンテナンス費削減という近視眼的な尺度だけで解体を決めるのではなく、二度と戻せないまち並みと建築物の歴史的価値や文化的価値、そして古い建物を解体して新築した場合のライフサイクルカーボン(炭素総使用量)の視点で本当に省エネか?の検討をして、累積コストについて専門家や学識者に確認し、その上で後世の県民市民にとってどうあるべきかを議会に諮るようであれば、国民意識のレベルが問われます。

「JIA建築家大会2025千葉」のメイン会場の県立文化会館は、聖賢堂と県立中央図書館の3作品併せて「千葉文化の森」と呼ばれる、建築家大高正人の代表格ですが、このうち聖賢堂は千葉県建築設計6団体の活動もむなしく昨年解体され、この世から姿を消しました。県立図書館もすでに解体リストに入っていると聴きます。こうした背景から、本セッションでは、大高建築の保存を例に、価値ある建物の保存活用を「県

民・市民も交えて」考え、公共建築物の管理の根本的なあり方を考え産み出すシンポジウムを創ります。(森田敬介)



解体工事前の聖賢堂

千葉のまちの真ん中をデザインする

開府900年から1000年へ向けた
持続可能な賑わいづくりと人づくり

[登壇予定者]

- 田中章 そらのかけら店主 / 食楽ICHIBA代表
- 須藤雅之 Sudo-Bags店主 / ちこほこ実行委員会
- 田野恵 子ども食堂「縁」 / 三希工房
- 明里 千葉県の郷土史家
- 松浦健治郎 千葉大学
- 連健夫 連健夫建築研究室 他

[企画担当] 柳田富士男(千葉地域会副代表)、寺川典秀(千葉地域会監査役)、飯沼竹一(千葉地域会)

千葉駅周辺、いわゆる「千葉都心」は、高度経済成長期からバブル経済期にかけて大きく発展しました。しかし近年では、郊外に大型ショッピングモールなどが増加したことにより、このエリアへの人の流入が減少し、大型商業ビルの相次ぐ撤退や個人商店の廃業が続いています。その結果、千葉都心の求心力の低下が大きな課題となっています。

このような状況を受け、千葉市は2016(平成28)年に「千葉駅周辺の活性化グランドデザイン」を策定し、まちのリニューアルを推進してきました。千葉駅周辺では大規模な再開発が進み、人通りは増加傾向にありますが、駅周辺以外のエリアには人が流れておらず、活性化には依然として課題が残され、街の空洞化、地盤沈下が進んでいる状況です。

そのため近年では、市民団体や関連企業などが歩行者天国や路上飲食パークといった実験的なイベントを開催し、人通りの回復を試みています。これまでに開催された主なイベントには、「ちば富士見屋台横丁」「千葉公園通り『ちこほこ』」「駅前大通りのパラソルギャラリー」「CHIBA SDGs Parklet Project」などがあります。しかし、こうした取り組みも、情報発信や認知度の面など課題があり、広がりや持続的な発展に繋がらないようで、歴史ある「親子三代夏祭り」や「中央区ふるさとまつり」などの祭典も含めて、一時的な人の集まりで終わっているように見えます。

このような背景のもと、「JIA建築家大会2025千葉」を契機として、過去のまちづくり活動の整理、現在行われている行政および市民レベルの取り組みの調査を行い、「市民・企業・行政・大学」が連携したまちづくりの企画、活動、ワークショップ(WS)を展開し、持続可能なまちづくりのビジョンを大会にて提案します。大会セッションでは、市民活動家や専門家、コーディネーターを招き、千葉都心の成立や事前のまち歩きWSの報告からはじめ、新たな視点やワクワクするような発想をもとに、活発な討議を行う予定です。なお、この活動は大会シンポジウムをゴールとせず、今後も千葉駅周辺のまちづくりに継続的に関



「CHIBA SDGs Parklet Project」地元企業、千葉市、フードロスに取り組む出展者によるウォークアブル実験

わる協働チームの構築を目指すものです。(飯沼竹一)

現在、各セッション、企画を充実させるために調整中です。
変更があった場合はご了承ください。

都市と地方が混在する千葉の食・文化の現状と未来

農とまちを繋ぐコミュニティから考える

[登壇予定者]

山根正敬 恋する豚研究所
岩山雅子 タンジョウ農場
中村拓志 NAP 建築設計事務所
磯野智由 STYLELAB 他

[企画担当]

神成 健(千葉地域会)、竹中 修(千葉地域会)、磯野智由(千葉地域会)

多くの人々が都市に居住して豊かな食文化を享受し消費する立場にあるのだが、現在我々の食を支え依存している生産者としての農業の実態については意外と知られていない。

道の駅などの直売所に並ぶ生産者名のある農作物から、合理化された大規模屋内生産施設より供給される野菜まで、その選択肢は幅広い。

千葉県はその温暖な気候、平坦な耕地の広がり、大消費地に近いという立地から実は農業生産量が多く(全国6位)、都市近くに多くの田園や農地が広がる農業県でもある。しかし、生産性の低さや天候に左右されやすいことに加え、他の産業と同様に高齢化に伴う後継者不足や都市の拡大に伴う廃業など、取り巻く課題も多い。

今回のセッションでは規模も向かうベクトルも異なるが、県内で特徴的な活動をしている3施設(サステナブルな環境をつくり出し、農業を見せ、体験することも意識した大規模な農場、地域の障がい者就労支援施設として雇用を積極的に進める酪農生産施設、小規模であるが都市近郊にて自然栽培の野菜を提供するキッチン)の活動を紹介する。その上で、農業関連施設の設計経験のある中村拓志氏の知見も加え、食の安全性や健康志向が重視される中での農業の重要性、さらに防災や耕地によるランドスケープ(棚田に代表される)の有効性、農とまちを繋ぐコミュニティをつくり出すために建築に期待されることなどを切り口として話し合うことで未来のまちづくりのヒントとしていきたい。(神成 健)



「タンジョウ農場」農場で採れた野菜をいただくことができるレストラン「タンジョウファームキッチン」が人気



農・食・アートが融合した「KURKKU FIELDS(クルックフィールズ)」



生産者直営レストラン「恋する豚研究所」

木材の非生産県における地域木材活用のための社会の仕組みづくり

安定した木材生産にむけた千葉県の林業と建築家の連携

[登壇予定者]

千葉県森林課職員(行政)
千葉県森林組合員(森林保全/伐り出し)
木材製材関係者(製材所(跡継予定者))
山主(森林所有者)

森田敬介 森田建築設計事務所
鈴木 晋 アルキテク設計室

[企画担当] 鈴木 晋(千葉地域会)

国は木材の利用促進として、国産木材生産量を増やす施策を進めています。これは林業が盛んな「木材生産県」とっては地域木材活用の促進にもつながりますが、全国全ての地域で地域木材の利用を増やすことに有効なしつらえではありません。そして、千葉県のように、木材の利用は全国上位ですが、生産量や森林・人工林の面積が少ない県は、「消費県」として木材利用を期待されます。このように国産材の利用促進策が、生産県と消費県の2つの属性で捉えられていることを知らない方も多いかもしれません。地域環境のためには、全国の建築家が、それぞれの地域木材を利用しやすい仕組みを持つことは有効であり、その方法の検証や研究を進めていくことが大切だと考えます。

そこで私たちは、木材生産量が多い「木材生産県」に対し、生産量が少なく、すぐに生産量を増やせない県を「木材非生産県」と定義し、生産量が少なくても安定して地域木材が活用できる仕組みづくりを考えることにしました。活動のきっかけは、2019年の台風で受けた森林被害でした。これを機に千葉地域会は、林業関係者と共に県産木材利用の研究・シンポジウムを続けています。さらに2023(令和5)年11月には、千葉県と地域木材利用促進協定(2者協定)を締結しました。

以上をふまえ、このセッションでは、千葉県森林課に参加協力いただき、また「山主」「森林組合」「製材所」「林業後継者」など県内で林業に関わるさまざまな方にも参加してもらい、地域木材活用の実態・問題点・今後の在り方の認識について、会場の皆さんも含めて互いの理解を深めていきたいと思えます。そして私たち千葉の建築家と一緒に、県産木材の活用促進のための共通の夢を見つけたいと考えています。これを千葉県の地域性を生かした木材利用の仕組みにつなげ、建築づくりだけでなく、里山づくりや地域環境づくりにもつなげることが、このセッションの大きな目標です。(鈴木 晋)



千葉の森林再生プロジェクトでの倒木見学会

